

## 荒浜保育所の場合

富岡恵（平塚幼稚園）

8月8日～10日の3日間、職場の保育者と共に2名で宮城県亶理町の荒浜保育所（荒浜保育所は、園舎が津波の被害にあったため、2歳児までは亶理保育所の1室を使い、3歳児以上は亶理保育所敷地内にあるプレハブの仮園舎で、3学年合同で保育が行われています。）にボランティアとして保育を手伝わせてもらいました。また、もともと荒浜保育所があった地域にも連れて行っていただき、自分たちの目で、現状を見ることも出来ました。

ボランティアに入る前、何か被災地の力になれることがあれば動いてみたい気持ちはあったものの、いざ現場に入るとなると、「何も知らない私が急に他園の保育に入って何が出来るのか」「かえって迷惑なのではないか」と不安ばかりが募りました。しかし、何とか3日間を終え、本当に現場の方々の方力になれたのかは、未だにわかりませんが、ボランティアを通してこちらが得たものは、とても大きかったように思います。

1人の先生は「宝物なんだけど」とファイルから、文字が勢いよく書いてある何枚もの紙を見せてくれました。そこには、震災直後から避難しながら何度も確認された時間と子どもたちの人数や、危険のことや大切なことを周囲に知らせるためのメモが沢山残されていました。「紙とペンは本当に役に立った」と思い出しながら言う先生の言葉や、そこに残されたメモの文字から、必死で子どもたちを守ろうとしていた先生方のその時の強い気持ちや、緊迫していた空気が、ひしひしと伝わりました。

また、1人の女の子は園外の広場に向かい、子どもたちと並んで歩いている道中、小学校を指差し「この学校にずっと避難してたんだよ。でも、今は仮設になった！」と当たり前のように話かけてきました。子どもたちなりに現状を受け止め、今を生活していこうとしている強さを感じるとともに、テレビや新聞で見ていたどこか特別なこととして見ていた避難所での暮らしが、決して特別ではなく、当たり前の日常として、そこにはあったことを実感させられました。一他にもまだまだ、ここには書ききれないくらい、印象に残った言葉や出来事は沢山ありました。そして、近づいて行くと真上を見上げなければ上まで見られない程の想像以上の高さになった撤去された瓦礫の山を見た時、それまでに聞いた現地の人たちの言葉が、どれだけの重さをもっていたのかを改めて思い知らされ、私は言葉も涙もでませんでした。被災していない私が簡単に気持ちを言葉にしたり、泣いたりしたら失礼になる。そう思われるくらいの生々しい現状を感じました。そのような現状をうけて、今だけでなく、これから先もその時その時に力になれることを考え続けていく

ことの大切さを痛感しました。

また、荒浜保育所の現状では、物資は確実に届いていて、今ではそれを保管するための場所が必要になるほどあるということや、材料は届いても、植える時間や人手のない花壇がある等、1から保育所を立て直して行くには通常の保育とは別の仕事が山ほどあること、それをボランティアの人に頼もうとしても、ボランティアの人数が徐々に減ってきているために、すぐには手配が出来ないこと、職員が集まって会議をする時間もなかなかとれずにいたこと等、現地で本当に求めていることは、ただメディアを通して得た情報から想像するだけではわからないと感じました。今回、保問研を通じて情報を得たように、現地の人たちの生の声や情報を得られる人から伝え聞く等、何が本当に必要なのかを見極めながらの支援を考えていく必要もあると感じました。

私は今回の経験を通して、自分の仕事の責任の重さ、当たり前で生活していることの幸せ等、沢山のことを改めて考えさせられた気がします。今回の経験を決して忘れないように思い出し、日々の保育や、日常を1日1日を大切に過ごしていきたいと思います。

